



友垣よ

練馬区立石神井西中学校だより
令和五年九月九日 第五号
校長 井上 貴 推

天災は忘れた頃にやってくる

夏休みが終わりました。学校が始まって一週間が経ちますが、生徒諸君はとても落ち着いた態度で、授業に諸活動に励んでいます。これから年末に向けて様々な活動があります。今まで以上に保護者、地域の皆さまとともに、生徒たちのために取り組んでまいります。ご理解、ご協力をお願いいたします。

さて、今月は防災月間であることから、各地で防災に関する催しが開催されます。防災を通して、この夏休みの間に起こった出来事も踏まえながら日本の文化や受け継いでいきたい心について考えてみました。

― 物理学者 寺田寅彦の遺した言葉

天災は忘れた頃にやってくる…これは、明治から昭和の初めに物理学者として活躍した寺田寅彦の言葉です。大変魅力的な人物であったらしく、物理学の専門家でありながら夏目漱石と親交があり、有名な著作である「吾輩は猫である」や「三四郎」の中にモデルとした人物が登場していることでも知られています。防災学者としても活躍し、冒頭の「天災は…」という言葉は初めて使った人物とされています。防災に関して多くの著書を残していますが、その中の一つ「天災と国防」で、「日本のように頻繁に甚大な自然災害を受ける国はまれだが、それにより我が国の国民性の上に良い影響を及ぼしていることも否定できない」と述べています。ここでいう「良い影響」とは、一つが「備えあれば憂いなし」という平時であって有事に備える心持ち、二つは「困ったときはお互いさま」という助け合いの気持ち、そして三つとして「水に流す」寛容の心だと考えられます。

2 「お互いさま」はピンチを救う

この夏も多くの自然の猛威が日本各地を襲いました。特に七月下旬から八月上旬にかけて台風6号が複雑な進路をたどり、沖縄から九州に甚大な被害がありました。

この台風では特に沖縄地方は一度通過した台風がUターンして再び通過することなどもあり、特に災害の状況がひどくなっていました。沖縄県内ではこの台風の影響で約二万五八〇〇世帯が停電しました。停電中に使用していたろうそくで火災が発生もしています。そんな中、そのような災害地で身を粉にして災害復旧にあたるボランティアの方々が各地で活躍する姿が多く報道されていました。

3 私たちに育まれた「心」を大切にしたい

寺田寅彦さんは「災難雑考」の中で、「日本という国は吊り橋の上にかかっているようなものだ」とも記しています。これは当時より遙かにいろいろなことが発達した現代においても変わってはいませんが、そんな我が国だからこそ育まれた「心」が私たちにはあります。これから冬休みまでの4か月間は、みんなが心を一つにして頑張る行事や一人一人がしっかり自分を律して学習に取り組む期間もたくさんあります。皆さんには「備えあれば憂いなし」、「困ったときはお互いさま」、そして「水に流す」という心がしっかりと備わっているはず。しかし、「天災は忘れた頃にやってくる」きま。この言葉は長い時間をかけて認知され、今ではことわざ辞典にも掲載されるようになりました。ことわざ辞典には「油断は禁物である」という解説が載っていました。我々の中にしっかりと根付いているはずの三つの心も「油断」として失われてしまいます。そして、それらが失われてしまうと、「天災（＝災い）」がやってきてしまうのです。石神井西中学校が誰にとっても素晴らしい笑顔があふれる居場所であるために、私たちに育まれた大切な心を絶対に忘れてはいけないし、失ってははいけません。私はいつもそう思っています。